

# インド大反乱とガーリブの晩年

片岡弘次

## The Trauma of 1857 and Last Years of Ghalib

Hiroji Kataoka

### 要旨

ガーリブが桂冠詩人としてインド大反乱の中でいかに身を処したか、大反乱後いかに晩年を迎えたかを述べる。

#### 1. ガーリブとインド大反乱

##### 1) 反乱の目撃者

1857年はインド亜大陸の歴史の中で、一つの面の終わりを記す年である。この年にセポイの反乱すなわちインド大反乱が起き、その余波の中で、ムガル朝（1526～1858年）の3世紀にわたってたてられた社会的文化的伝統が崩壊した。ガーリブ（1797～1869年）はその時から生涯の終わりまで、希望を失い、傷心の目撃者として生きることがその運命であった。爛熟した文化、洗練された文化は再び同じところに戻らなかった。ガーリブはレッド・ホートがバラック建てにされてしまったのを見た。神の代理をなすはずであった皇帝も以前のようにはならず、ガーリブはデリーが無残に壊されていく様子を見ていた。

1857年の反乱が起こる前、デリーの大混乱を予想する者は誰もいなかった。広く知られていたことは、イギリスはムガル朝の居所をレッド・フォートからデリーの外のどこかへ移す計画があり、皇帝バハードゥル・シャー2世（在位1837～58年）の後継者を皇帝でなく皇子とするだろうということであった。また宮廷や都市の中にはペルシア皇帝やロシア皇帝がイギリス勢力を追い出しにやって来て、ムガル帝国をその初期の栄光に戻すと考えている者もいた。また抑圧されているイスラーム教徒の同胞をペルシア皇帝が助けに来るとのポスターがジャーマー・マスジッドにはられていることもあった<sup>1)</sup>。

##### 2) 反乱の朝

メーラットから来た反乱軍を最初に見つけたのは皇帝であった。皇帝バハードゥル・シャー2

世はジャムナ河を遠方に見ながら座っていた。明け方7時、町はまだ迫り来る嵐に気づいていなかった。デリー・カレッジの学生は登校し教室に来ていた。カルカッタからの新聞もいつもの時刻に到着していた。ガーリブはフォートへ行く身支度をしていた。宮廷を護衛していたのはイギリス人の指令官であった。その時、反乱軍の騎馬兵はダルヤー・ガンジの近くラージガートを通って町へ入り、イギリス人を無造作に殺し始めていた。ガーリブはその様子をつぎのように書いている。「1857年5月17日月曜日の午後、レッド・フォートの城壘の混乱は、町の四隅でも感じられる程だった。デリーの開門された扉にいっせいになだれこみ、興奮した騎馬兵やメーラットからの歩兵は狂人のように町を荒らした。かれらは役人やイギリス人を殺すまで残酷な行為を止めなかった。見つけしだいイギリス人や役人の家を壊し回った。……部屋に閉じこもり私は騒乱の音を聞いていた。レッド・ホートの護衛兵が殺され、イギリス人の代理店がさん奪される音を聞いた。歩兵の喚声や騎馬のひずめの音を聞いた……」<sup>2)</sup>。皇帝は乗り気でなかったが、その夜、反乱軍に加わり兵士を祝福した。1857年9月13日、イギリスがデリーを奪回するまでの4カ月間、混乱が続いた。

### 3) 反乱に対する貴族の態度

ガーリブや貴族階級の多くにとって反乱は悪夢であった。イギリスは事実上の支配者でムガル皇帝は法律上畏敬のシンボルであった。1857年それに突然終止符がうたれ、人々はイギリスに反対して皇帝の方に組するか、あるいは皇帝に反対してイギリスにつくかの選択を迫られた。ガーリブは日記『ダスタンプーイ』を書き続けた。それは意図的に親英であり、厳しく反乱を批判するものであった。しかし問題はこの日記が文字通りの親英に受け取れるかであった。『ダスタンプーイ』はガーリブの純粋な信念ではない。それはデリーがイギリスにより奪還された後に書かれたもので、その目的はイギリス人に対して自らの無実を証明しようとするものであった。イギリス側は勝利すると残酷で、ほんの少しでも反乱側に荷担した疑いがある者は絞首刑にした。ガーリブが日記『ダスタンプーイ』を書いた目的は二つあった。まず第一は、それにより報復を避けること、第二はイギリスを説得し年金を復活させる口実を作ることであった<sup>3)</sup>。『ダスタンプーイ』は頌詩カスィーダの形式、つまり封建時代、パトロンから恩恵を得ようとして詩人が使う形式で書かれた。

### 4) イギリスに対するガーリブの賞讃

『ダスタンプーイ』の中でイギリスに対するガーリブの賞讃は、ガーリブにとっても耐えがたい程の厚かましきをもって表現された。ヴィクトリア女王を「星のようなすばらしい人」と呼んだ。イギリス人に対する形容詞には「勇敢な」「善良な性格の」「勇気ある」「獅子のような心の」などの言葉が使われた。一方、反乱軍の兵士によって殺されたイギリス人女性については、「顔が月のように輝き」「体は銀のように光り」「色白ですんなりした人」などの言葉が使われた<sup>4)</sup>。このよう

なへつらいの言葉の能力は19世紀のインドの詩人や作家に充分マスターされつくされているものであった。ガーリブにとり難しいことは、デリー奪還後のイギリス兵の暴力の残忍性をいかに正当化するかであった。「わたしが述べた通り、怒れる獅子（イギリス）が市に入って来た時、かれらも無力な者や弱い者を殺したり、家に火を付けたりした。しかしそのような残虐な行為はどの征服の後でも、いつでも起こることである」<sup>5)</sup>。また「略奪は普通であったが、殺しは避けられないことである。イギリスは怒りに燃えていたが、自制していたように見える」<sup>6)</sup>。「ムハッラムの16日、すなわち9月8日、金曜日の正午、勝利者は市を占拠した。大量の人の逮捕の恐怖、殺害のニュースはわれわれの所までにも達し、町は恐怖で満ちていた」<sup>7)</sup>と述べているが、真実は隠す努力にもかかわらず現れて見える。ガーリブの本音は、友人への手紙でしか述べられていない。

#### 5) イギリス側の勝利

ガーリブの最大の関心はムガル朝との関係をいかに減じるかであった。一方イギリス側は特に、宮廷側に荷担したとの疑いを持たれる者すべての狩り出しを行った。ガーリブは詩に関心のある皇帝の詩の師匠であり、疑いが持たれていた。ガーリブにとり宮廷との関係を否定することはおかしくなる。しかしその関係を、ガーリブは自分は皇帝のもとでの単なる雇われ人としての存在であったとして薄めようとした。その一例として『ダスタンプーイ』の中でつぎのように述べている。「この本の読者は知ってほしい。私はイギリス人のパンと塩を食べて生きてきた。私は幼い時から、この世界の征服者のテーブルで養われていた。7、8年前、デリーのムガル皇帝はわたしを宮殿に呼んで、わたしにチムール朝の歴史を書くように命じた。その後、皇帝の詩の師匠が亡くなり、その後任の詩の添削者としてわたしが任命された。

わたしは年おいており弱い。静かな所で孤独の生活になれてしまった。さらに友達に対しても不便をきたす程、耳が不自由になってしまった。わたしは相手の唇の動きだけを見ている。週2回、宮殿を訪れ、もし、皇帝からの用があるならばばらく皇帝の面前にとどまる。もし皇帝が部屋から現れて来ない時は待ち合い所で待ち、その後で家に帰った。この間、わたしが完成したものを皇帝のもとに持っていったり、あるいは使者を通して届けさせたりした。これが私と宮廷との関わりです。この場所は私に休息と平安を与えてくれたが、宮廷内の混乱からは一切自由だった。だがどんな特別な栄誉や幸せもなかった」<sup>8)</sup>。しかしこの言葉だけでは反乱軍を指示しなかったという確かな証拠にはならない。そこでつぎのようにも書いている。

「イギリスの恵みによりパンと塩を得ていた貧しい世捨て人たちは、市内のいたる所に散りじりになって、路地裏や小路に遠く離れて住んでいた。これらつつましやかな人たちにとっては、斧と矢の区別もつかなかった。剣も持たず、夜は泥棒の足音にさへ驚いた。これらの人々は戦える人ではなかった。ただ悲しみに打たれ、じっと家に閉じこもっているだけで、他は何もできない者たちであった。わたしもそのような力のない者の一人であった」<sup>9)</sup>。

## 6) ガーリブの態度

ガーリブは反乱の中心をなすセポイに批判的で、彼の忠誠は封建制のピラミッドに向けてのものであった。だがそのピラミッドは「暴徒」「法のない多数」「乱暴な足の兵」であるセポイによって容易に崩された。新しい力と偉厳によって励まされたセポイは封建貴族の言いなりには最早ならなかった。

## 7) ガーリブの外への態度

デリーに対する戦闘は当初、イギリスにとって容易ではなかった。だが5月30日より31日までのヒンダン川近くの小ぜり合いでの勝利、その一週間後のバドリーの戦いでの勝利と勢いを盛り返してきた。インド側は皇帝バハードゥル・シャー2世が中心となり、長男の皇子ミルザーを指令長官にして、いろいろ策を練った。このような状況においても皇帝の詩の師匠として宮殿に毎日やってくるガーリブがひとり孤高を保っていることはありえないことだった。イギリス側はガーリブも関係しているとの疑いを持っていた。だがガーリブを連座させるような記録は宮廷に残っていない、多くの記録は焼かれてしまっていた。1858年3月のタフタへの手紙で、ガーリブは宮廷の書類の捜査で名前が挙げられなかったことへの安堵感を表している。しかし完全に連座の容疑をぬぐいさることはできなかった。反乱の最中、皇帝バハードゥル・シャー2世による貨幣鑄造があったが、それはガーリブによって作られたものと新聞で報道されている。またイギリスに対する勝利に関して、皇帝を賞讃するカスィーダも書いている。それに対し皇帝から1857年8月にほうびが与えられた証拠もあった。

当時イギリス軍に味方しているか、反乱軍に味方しているかは、その人の振る舞いで判断するしかなかった。ガーリブについてつぎのように述べている人もいた。「ガーリブとミルザー・イラーヒー・バクシュはイギリス側に友好的で、熱心に反乱軍の転覆と完全な敗北を望んでいるのは疑いがないという報告がされていた。しかし話半分にとられており、皇子や反乱軍が本当にそれを信じていたとすれば、ガーリブの妻であろうと子供であろうが、ガーリブと共に殺してしまったであろう」<sup>10)</sup>。

ムバルク・シャーはガーリブが皇子や反乱軍に信用されていたと述べているが、これはこの期間、ガーリブが宮廷とこの点につき非常な係わりがあったことを示す。

## 8) 『ダスタンプーイ』とガーリブの本音

かくして『ダスタンプーイ』で親英的な感情を強調すればする程、それだけガーリブの状況が見えてくる。ガーリブは自分の本当の気持を記録することを恐れた。しかし心を許した友達には手紙の中でその一端を吐露している。

1857年12月、タフタにあてて。

わたしはあなたに詳細に書くのを恐れています。今、フォート内で仕事をしている人は猛烈な

勢いでしています<sup>11)</sup>。

1858年1月、ハキーム・グラーム・ナジャフ・カーンにあてて。

今も我々は生きています……私も妻も子供たちも。しかしつぎの瞬間、何が起きるか分かりません。わたしはペンを取れば、書くべき多くのことがあります。しかし今、それを書けません。もし再び会えることになれば、その時すべてのこととお話しするつもりです<sup>12)</sup>。

1858年2月、マジルーにあてて。

もしわたしが生きていて会える日があるならその時に話します<sup>13)</sup>。

1858年2月、サーキブにあてて

再び会えたら何でも話します。さもなければすべて終わりです。わたしは書くのが恐いです<sup>14)</sup>。

『ダスタンプーイ』の中でガーリブは年金訴訟の件も持ち出している。典型的なカスィーダの形式でつぎのような趣旨で要求している。

「たとえわたしが今、年金の残りを得ても、わたしの負債によって生じた悲しみのフィルムは、わたしの心の鏡をぬぐいさることは出来ません。しかしもしわたしが年金の滞りが得られないとするなら、わたしの心は石によってさらに壊された鏡のようになります……わたしは権威あるところからの命令を望みます。つまりタイトル、名誉ある長衣、そして年金を望みます」<sup>15)</sup>

#### 9) ナショナリズムは今だ芽生えず

ガーリブは実際の権力に対し、尊敬が社会的に受け入れられる封建制度の中で生まれた。ガーリブは『ダスタンプーイ』の中で書いている。

「インドの支配者、特にデリーの支配者として来る者には、誰にでも賛辞を送ることがわたしの習慣である。そこでわたしは祝福の頌詩カスィーダを書き、ジョン・ローレンス卿を賞賛し歓迎した」<sup>16)</sup>。

当時、人々の間にナショナリズムの意識はまだ未発達のものであった。反英的な感情が一貫して、あるいは明確なナショナリズムの意識に変えられ、それが利用される時代ではなかった。イギリスがデリーを奪還すると、英国支配者への忠誠は疑うことのできないものであった。

#### 10) 反乱の失敗

反乱が失敗に終わると現状の受容と、できるだけ多く過去の利益復興を取り戻す要求が各人によってされた。ガーリブの場合、反乱軍荷担の疑惑が強かったので、とりわけ生死の問題が深刻であった。そして年金以外の収入はなかったので従来年金を取り戻すことも重要な課題であった。反乱の最中、宮廷との関係は深かった。『ダスタンプーイ』の中でイギリス側の戦術についても賞讃しているが、本当の気持ちはカモフラージュされて出てくる。「ムガル朝の皇子の運命は、ある者は射殺され、またある者は死の竜によって食いつかれるしかなかった。そしてロープで首

をつられる者もいれば、苦しまぎれに体をよじって死んでいった者もいた。投獄される者も逃亡した者もいる。そして年おいた皇帝は裁判の身となった。

シャガールやバラブガル、ファルーカナガルの地主たちはそれぞれ別々に処刑された。かれらの命は血がこぼれたとは誰もが思わない仕方で終わった」<sup>17)</sup>

最後の行の皮肉は不正義への怒りの感じを隠していない。1858年11月、東インド会社は解散し、インドはイギリスの直轄植民地となった。

#### 11) 反乱後のガーリーブの苦しみ

反乱の間、そしてその直後のガーリーブの個人的な苦しみは大きかった。『ダスタンプーイ』の中で略奪と統治機構の崩壊を嘆いている。たくさん手紙を書くガーリーブは特に郵便制度の壊滅に驚き、「郵便制度が混乱に陥り、サービスがほぼ止まってしまった。郵便屋の往来がなくなり、手紙は送られて来ない」<sup>18)</sup>と嘆いている。定期的に来ていた新聞も止まった。ガーリーブにとりもって重要なことは酒が手に入らないことであった。ガーリーブは『ダスタンプーイ』の中でつぎのように書いてある。

「真実を隠すことは、名誉ある人の行いではない。わたしは半分イスラーム教徒だ。そして宗教的な厳格さから自由である。外国の酒を飲むことはわたしの習慣である。もし飲まなければ夜、眠れない。このごろ酒の値段は手の出ない程になった」<sup>18)</sup>

経済的困窮は非常に大きな問題だった。年金はイギリスの徴税官によって払われていたが、1857年5月、止まった。その上ムガル朝からの収入も止まっていた。借金も出来ず、妻と二人の養子、何人かの使用人そして本人は、家具や衣服を売ってどうにか生計をたてていた。他の人がパンを食べている時、衣服を食べた。衣服を食べ終わった時、死ぬだろうとガーリーブは皮肉っぽく書いている<sup>19)</sup>。

#### 12) 反乱後の社会

イギリス側による都市デリーの奪還の後、イギリス軍による殺害や激しい略奪の日々が続き、水も手に入らなかった。1857年の夏は特別暑く、5月6月は特にひどく、風通しのよい家で過ごしてきた人々も暴徒によりその家が壊されてしまった。

ガーリーブにとり幸いだったことは、ガーリーブはパティヤーラのマハラジャの保護下に入っていた通りに住んでいたことだった。マハラジャははじめからイギリス側に荷担していた。その通りには有名なハキーム達が住んでおり、その庇護を受けていた。イギリス側の勝利が確定すると、その地域には危害が加えられないという約束になっていた。

10月5日、突然押し入ってきた兵士によりガーリーブとガーリーブの家族が尋問のため、ブラウン大佐の所に連行させられた。その時、有名なやり取りがある。ブラウン大佐はブローケンなウルドゥー語で「あたりはムスリムですか」と聞くと、ガーリーブは「わたしは半分ムスリムです」と

答えた。「なぜですか」と更にブラウン大佐が聞くと「豚肉は食べないが酒は飲むからです」とガーリブは答えた。その軽薄さは、本当の意見を表すことから離れ、都合がよかった。大佐はガーリブの答えに喜び、ガーリブを放免したという。だが実際は、イギリス側は充分ガーリブに疑惑の念を抱いていたが、ガーリブを有罪にする確かな証拠がなかった。そしてまた『ダスタンブーイ』を書いたことも放免の理由となった。

### 13) デリー陥落後の社会

1857年の後、イギリス支配はデリーの政治的、社会的、物理的、心理的な様相を取り返しができないほど変えた。1857年以前には都市には内的なリズムがあった。イギリス人の存在は不調和をもたらせてはいたが、基本的な形態は変わらなかった。1857年以降ガーリブのような貴族社会に属する者は道を踏みはずし、絶望の中に陥った。

デリー陥落の後、宮殿は組織的に略奪され、彫刻やモザイクにはめられていた宝石は銃剣ではじくり出され、豪華なシャンデリアも酔った軍隊に笑いながら砕かれた。モーティー・マスジッドの天井にあった黄金の板は無造作にはがされ、軍隊維持のため売却された。

帝国の家系の中で21人の皇子が絞首刑を命じられ、1日のうちに処刑されてしまった<sup>20)</sup>。さらに何人かは後で降伏すると冷酷にも射殺され、その死体はチャンドニー・チョウクにさらされた。その裸を覆うのはたった一枚の布しかなかった。皇帝バハードゥル・シャーは降伏するとレッド・フォートの中の天井の低い白い壁のうす汚い部屋に幽閉され、見せ物にされた。

ガーリブは皇帝バハードゥル・シャーの詩の師匠だった。二人の関係は10数年に渡って両者に緊張関係のないことはなかったが友好関係は良好であった。バハードゥル・シャーの息子たちもガーリブの弟子でありガーリブは何年もの間、宮殿に通った。ガーリブは宮廷の詩会に参加することで詩人としての務めを果たしてきた。それがイギリス側による皇帝への侮辱、宮殿の破壊、そして最も華麗であった建造物がバラック建てのようにさせられてしまったことは、ガーリブにとり大きな精神的な外傷となり、それが晩年まで続いた。

デリーは荒廃してしまった。ムスリムもヒンドゥーも金持ちも貧しい人も、イギリス軍の怒りを恐れ、町の外の避難所に移ってしまった。町の中に残っている死体を秃鷹は飛び上がられないほどつついて食べた。「デリーの町中に1000人以上のムスリムを見つけるのは不可能である。だがわたしはその1人である。町から遠く離れてしまった人もいる。多くの人が町の外にかやぶきで住み処を作り、運命が目隠しされてしまったかのようにして住んでいる」<sup>20)</sup>とガーリブは書いている。1859年2月、ガーリブは友達に「デリーに住むことを望む者はイギリス兵に心付けをしなければならない。そして町に住むチケットを買わなければならない」<sup>21)</sup>と手紙を書いている。デリーに帰ってきてよいと許可が出たのは1859年11月、デリーを脱出してから2年後であった。

#### 14) ガーリブの悲しみ

ガーリブの苦しみは個人的、精神的な傷の深い感覚からわき起こっている。1858年4月、その悲しみをタフタに「仲間もなく、ひとりで1日中することもない」と書いている。『ダスタンプーイ』の中にも同じ繰り返しがある。「町に数千の友達とすべての家庭に知人を持つガーリブは、今その孤独の中でペンを除いては友達は誰もいず、自分の影以外、誰も友達がいない」<sup>22)</sup> 孤高的にもかかわらず、社交的なガーリブ、優華に会話を楽しむ人、機知に富んだ言葉のやり取りのため機を逃さないユーモリスト、聴衆に元気づけられる人、自分の目の前にいる弟子を誉める愛すべき師であるガーリブ、その友人たちは処刑されたり、どこかへ逃げてしまった。そしてその不在は、ガーリブの人生において、空虚感と孤独感を生むだけだった。

## 2. ガーリブの晩年

### 1) 反乱後のデリーの復興

1859年、デリー銀行が再開され、1864年、デリー・カレッジの授業も再開された。また1867年、デリーの運河に再び水が流れ始めた。さらに同じ年、最初の列車が市民の興奮と驚きの中で走り始めた。1863年、市民委員会が開かれ、郵便局や英国式市場、時計台がチャンドニー・チョウクに建てられ、ヴィクトリア式の新しい建物が市の他の建物にそぐわない感じを与えていた。

### 2) 反乱の記録者としてのガーリブ

これらの変化の間、1860年と1862年の飢饉、さらに熱病の流行、コレラの発生はデリーの市民を不安と混乱に陥し入れた。この新しい不幸の発生をガーリブ自身は目撃し、あいかわらず疲れを知らない記録者であった。

1860年ガーリブは、デリーは5つの連続した侵入軍によって荒廃させられたと書いた。すなわち反乱が始まった時の混乱の侵入、イギリス人が町を占拠し生じた混乱、飢饉の侵入、コレラの発生、そして衰えることのない熱病である。生活必需品の不足は慢性的であった。粟は3ポンドが1ルピー、ヒヨコ豆は16ポンドが1ルピー、それに反し死は最も安価であるとガーリブは書いている<sup>25)</sup>。1860年の飢饉は水不足で起き、2000人の人が住む家を失った。当時は毎日、数件の強盗事件が発生しない日はなかった。

ビルマに流刑になっていた皇帝バハードゥル・シャーの死亡のニュースが入るとガーリブはそれについて友達に皮肉っぽく報告した。「1862年11月7日、バハードゥル・シャーはイギリスの監獄で死体となって解放させられた。われわれは神のもとから来て、再び神のもとへ帰る」<sup>23)</sup> と。

### 3) デリーの荒廃

これより先1858年、タフタに「君はデリーの破壊を哀れんでいない。町はなお繁栄していると思っているようだが、ここには水タバコを売るホッカー屋は1人もいない」と言い、1863年には



別の人に「デリーは今も、城があり帝国が続いていると思っているのですか。牛はこれをすべて食いつくし、肉屋は肉屋で牛をすべて殺してしまい、肉屋も路上で死んでしまった」<sup>24)</sup>と書いている。

#### 4) ガーリブの財政的窮状

皇帝の統治はなく、宮廷は終わり古い秩序はなくなってしまった。ガーリブにとり死活の問題は、どこから財政的支援を得るかであった。ガーリブに対するイギリスからの年金は1857年5月から止まったままだった。ガーリブが金銭的援助を得られる唯一の手段は金持ちや権力者のパトロンを探すことしかなかった。かすかにその関係が途絶えてなかったのは、1855年ペルシア語のキターを献辞したが返事がなかったラーンプルの藩王だけであった。しかし友人ファズルル・ハックのアドバイスに従い再びカスィーダを送ると、運よくそれが受け入れられた。そして1859年11月より藩王の詩の添削者となれ、月々100ルピーを得ることになった。1860年1月、藩王の幾度も誘いに従い、30年ぶりにデリーを離れラーンプルを訪ねることになり、ラーンプルに着くと大いに歓迎された。

#### 5) ガーリブの身分の回復

ラーンプルから2カ月してデリーに戻るとイギリスからの年金が1860年4月に復活した。イギリスに対し藩王からの働きかけがあったからであった。ガーリブの年金は年額750ルピーだったので、3年間の遅滞として2250ルピーをまとめて得た。このうち250ルピーがさまざまな経費として差し引かれ2000ルピーを借金の返済にあてたが、600ルピー足らず残りの負債として残った。また1863年、ガーリブが式典などの時に着て、貴族であることを表す式服も英国政府より復活した。ガーリブにとりそれは大きな満足であった。年金の復活はイギリスからのガーリブへの更新と永続的な財政の安定を意味し、式服の復活はガーリブの社会的階級の再確認を保障するものであった。すなわちイギリスは当時、インドの中で最高の力を持つ所であり、そこからの復活の承認はガーリブの仲間うちで、ガーリブの身分の回復を示すものであった。

ガーリブの自己評価は時々、コミックに近い。ガーリブは称号や厚遇、名誉を示す衣服、宮廷への招待などに子供じみた喜びを見出した。イギリスからそのステータスの承認を得ることは、ガーリブにとって大きな目的の一つであった<sup>25)</sup>。

ラーンプルの藩王ユースフ・アリー・カーンは1865年ガンで亡くなった。1859年から65年までの間、ガーリブはラーンプルに滞在していたわけではなかったが、ラーンプルの宮廷詩人の役割を果たしていた。藩王は添削のため詩を定期的にガーリブのもとに送ってきた。そして毎月数百ルピーが送られてきた。しかし家族の生活費、こまごました出費、税金、門番などの使用人への支払い、借金の返済やその利子の支払いで、ラーンプルの藩王が送ってくる金でも充分でなかつ

た。手紙の一通の中で、乞食をして歩き回りたい程と書いているが、従来の生活スタイルを変えようとはしなかった。「わたしは死ぬのは恐くない。だが、なぐさめのための欠乏はわたしを不安にさせる」<sup>26)</sup>と書いている。1862年のある時期、事態が厳しくなると、今までの習慣を止めようとした。朝酒を止め、肉の分量を半分にし、長い習慣であった夕方の酒も止めた。それはガーリブ以上に友人の方が驚くことであったが、それから一カ月もしないうち、ランプルからいつも以上の金が届くと、以前のような生活にまた戻ってしまった。

#### 6) 『ガーリブ詩集』の再版と肉体的な衰え

ランプルは文学に対しガーリブが好んだ舞台として、デリーに代わるものではなかった。ガーリブは老齢にもかかわらず文学活動はデリーにおいて活発にした。1861年、ウルドゥー詩集の新しい版が出た。1862年ペルシア語詩集の新しい版も出た。同じ年、ペルシア語の辞書“Burhān-i-Qaṭi”に関するコメントの書である“Qaṭi-i-Burhān”という散文の本も出した。1863年、友達にその書簡集を出すことを勧められ“Ud-i-Hindi”もをまとめた。この題での本は1868年に出され、ガーリブの死後、同じく書簡集“Urdū-i-Muallā”が出た。勿論ガーリブは詩の添削を頼まれればそれもした。添削はデリーに住む人だけでなく、バレーリー、ラクナウ、カルカッタ、ムンバイ、スーラのような遠い所からもきた。そしてガーリブは出来るだけこれらの人たちにも関心を払うようにしていた。

だが衰えていく健康はガーリブに深刻な詩を書くことを止めさせてしまった。

1863年、ガーリブはデリーで流行の天然痘を患い、両手や右足にそれが出来て傷になった。西洋医学の訓練を積んだ外科医が吹き出ものを焼きとったが悪性のはれが足に出て、靴もはけず、およそ1年半ぐらいに及びこの症状が見つかった。

何年も前から弱っていた聴力はますます弱まり、視力も落ち記憶力も薄れてきた。添削を受けに送られてきた詩や散文も間違って返送した。ガーリブはこれに苦しみ、自分の弱まりつつある力を伝えようとした。「あなたの召し使いが送ってくれましたあなたのガザル、わたしがうっかりしている間、どこかへ行ってしまうました。どうもわたしはなくしてしまっただけです」<sup>27)</sup>。また詩の添削の催促にも癩癩を起こしている。「あなたが言っている四行詩を覚えていないと、すでに連絡したではないですか」。あるいはまた「あなたはわたしが寝ているにもかかわらず送れと言う。どういうことですか」<sup>28)</sup>。ガーリブは1日中ほとんどの時間を男部屋で横になって過ごし、客が来て立っていなければならぬ時だけ立っていた。ガーリブは自分で星占いをして、1861年に死ぬ予定であった。ちょうどコレラの大流行の時であったが、その年が過ぎると、一般的な疫病で死ぬのは自分の威厳にかかわると言った。

病気はガーリブを驚かすよりも悲しませた。痛みでベッドに伏し、体中に吹き出ものが出た時、激しいうつ病を患わねばならなかった。そして若く元気だった時をなつかしんでいる。

ガガル234-1

Muddat hui hai yār ko mihmān kie hue

Josh-e-qadaḥ se bazm chirāghān kie hue<sup>29)</sup>

長い時間が過ぎてしまった わが恋人がわが家の客人になってから

酒の大杯で宴が明るく輝いてから

苦痛がない時、瞬間をつかまえる詩人的感覚はなお残っており、衰えてはいなかった。瞬間に生き、瞬間をすくい取り、新しくする力があった。「今、雨が止んだ」とガーリブは1863年8月に書いている。「広々した台地、月、涼しい風、一晚中空に見える火星、明け方輝いている金星、月が西の空に沈み一時出てくる金星、ワインの楽しい一口などと」

ガーリブは当時、自らをファキールと考えるのが好きであった。部屋に引きこもった観察者であり、参加者でなかった。岸から本流を眺める人であり、中央の舞台に立つ肉体的な力がなくなっていることを自覚していた。

ガザル210-1

Safīnah jab kih kināre peh ā lagā ghālib

Khudā se kyā sitam o jaur nākhudā kahie<sup>30)</sup>

わが船が向かう岸についたら ガーリブは

船頭の横暴も意地悪さの様子を神々に言うだろうか

部屋に横になりながら、毎日の出来ごとや健康だけでなく、人生の問題、人間の良い点、悪い点なども考え、友達や知人に手紙を書いて過ごした。

1867年までにガーリブの健康は明らかに衰えてしまった。1866年1月、ラーンブルから戻る時に事故にあった。幸い命には別条なかった。ガーリブが乗っている「かご」が川を横切る時、橋がこわれた。荷物をつんでいる荷車と人夫は向う岸で立ち往生となった。荷物の中には寝具もあったが凍りつくような冬の夜だった。やっと宿を取ることができ、一夜が明かされた。旅の苦難は弱っている体に打撃となった。食事にあわず、途中幾度も食事をしなかった。家に戻ると健康は徐々に回復したが、慢性的な病気が再発し、仙痛が絶えずおこるようになった。糖尿病の診断はされなかったがその兆候があった。ガーリブの食事はますます細っていった。「わたしの食事は朝、7個のアーモンドのジュース、そこに砂糖で甘くした水を混ぜて飲み、昼は2ポンドの肉を使ったスープ、夕方にはカバーブを3つ、そして夜には2時間半ぐらいかけて自家製のワインを5トール飲みます」<sup>31)</sup>。これがガーリブの食事であった。病弱にもかかわらず酒は毎晩飲み続けた。1867年の初めまでに記憶力はほとんどなくなり、聴力も衰えてしまった。だが依然知的鋭さはあった。1866年手紙の中で、「ふるえがひどく、物がよくつかめない」と書いている。そして

歩くことも困難になっていた。1867年には「わたしは庭に寝ます。二人の下男がわたしをヴェランダに連れ出してくれます。暗い場所にわたしを降ろします。わたしはうす汚い部屋で1日を過ごします。夕方になると外に出てベッドに横たわります」<sup>32)</sup>。このような状態の中で添削のために送られてくる詩を一生懸命になって見た。1867年7月には書くことができなくなった。だが詩はものすごい数で送られてきた。ガーリブはそれに適切なコメントを与えるのに全力を尽くしていたが、それが出来なくなると苦しみ、1868年8月、新聞に「添削の詩がたくさん来ます。わたしは自分がいやになる程、寝台に横になったままです」<sup>33)</sup>の言葉を載せたが添削のための詩はあいかわらず多数、送られてきた。

#### 7) 晩年に沸き起こった文学論争

人生の終わりに近づいた晩年、ガーリブは意地の悪い文学論争に巻き込まれた。1859年、ガーリブはデカンの学者モールヴィー・ムハンマド・フサインのカルカットで出版された有名なペルシア語の辞書“Burhān-i-Qāṭi”について、ガーリブは“Qāṭi-i-Burhān”を書いて批判した。それはペルシアの古典学に対し、インド学派の権威にたよっていた人を批判するものであった。M.M. フサインはインドでたくさんの信奉者を持つ学者だったので、ガーリブの批判は大きな反発を引き起こした。それはガーリブの説明の中に時々みえる嘲笑的で軽蔑するような調子によりさらに火がついた。ガーリブの批判の中には明らかな事実の脱落もあった。ガーリブ讃美者の一人、ハーリーですらガーリブは幾つか、うっかりした間違いを犯している、ガーリブは記憶だけを頼りにして書き、クロスチェックをする参照すべき資料を持っていなかったからだと指摘している。ガーリブはコメントを書いた時、明らかにそれを出版する積りはなかった。しかしコメントは後になり、友達で紹介で出版された。もしガーリブがそれを出版する考えで書いていたとしたら、言葉にも慎重を期したであろう。一方、文学の問題が関係してくる意見について臨機応変の所がなかった。ただより多くの読者に辛辣な批判を聞かせるのを望んでいただけだった。しかしながら続いてくる者の叫びを過小評価したのは確かに失敗であった。ガーリブの本を批判する幾つかのパンフレットが出て、町中がガーリブと一戦を交える準備をしていたかのようであった。

パティヤーラのアミーヌッディーン・カーンがガーリブの書いた批判文を批判するパンフレットを出した。ガーリブにはそれと闘うべき力もエネルギーも残っていなかった。しかしパンフレットの内容があまりにも侮辱的なものだったので、1867年12月、ガーリブは British Assistant Commissioners Court に名誉毀損で訴訟を起こした。

問題にした点はアミーヌッディーンによって出されたあてこすりが本当にそうであるかどうかの点であった。アミーヌッディーン側はそれに対する充分な答弁ができる証人を用意していた。さらにガーリブにとり悪いことは、この問題にあまり詳しくないイギリス人の裁判官がこの問題を扱うことになった。すぐ分かったことはガーリブにすべてが不利に作用するだろうということであった。そして相手側の弁護人の中の保守派の人々にガーリブを飲んだくれとか神を恐れない

男とかと非難させる隙を与えてしまっていた。訴訟が長びけば長びく程、ガーリブは屈辱を受けねばならない事態であった。結局1868年3月23日、ガーリブは自からその訴訟を取り下げねばならなかった。

ハーリーの説明によれば、論争は文学的な事柄から始まった。だがそれらがガーリブの個人的なことに変えられてしまい、ガーリブの日常の行動が攻撃の対象になってしまった。保守的なムスリムはガーリブが長い間、イスラームやその体制に対して取った行動を非礼と考え、ガーリブを攻撃する機会とした。さらに1866年までには、ガーリブの個人的な力と影響力がなくなってしまった。ガーリブを甘やかせていた皇帝は流刑で死んでしまった。ガーリブを支持していたイスラームの封建階層の多くは、反乱後イギリス人の殺戮にあっていた。イギリス人はイギリスで、都市で新しい階層とパートナーを組んでいた。年おいた病気で借金だらけのガーリブが接触できるのはランプルの太守だけであった。だがこの新しい太守もその父親がしてくれていたようにガーリブを扱わなかった。それ故“Qaṭī-i-Burhān”の論争は文学的問題以上のものを含んでいた。その多くが保守的なイスラーム教徒にとって武器となってしまった。生涯にわたり、ガーリブは保守的な宗教指導者にかみつぎ、酒を愛し、宗教の教えに無関心を誇示してきた。今その仕返しに保守的な宗教指導者から始められた。確かに1日5回の礼拝はしなかった。断食もしなかった。しかし疑いもなくガーリブは神の唯一性を信じていた。そして神以外に何もないという言葉がガーリブの唇の上にあった。

#### 8) ガーリブの借金

晩年ガーリブの借金は1000ルピー以上あり、その返済に苦しんでいた。死期が近づくと借り主は取り立てに攻撃的になった。借金を払うことなく死ぬことはイスラーム教徒にとり悪徳である。これはガーリブにとり宗教的義務と名誉ある行為が一致して迫った。お金について無関心であり、闇くもに借金を重ねた者が、晩年そのやりくり苦しむことは皮肉であった。死後、借金を返済できる何の当もなかった。ガーリブの心配は妻がガーリブなしでどうやって生きてゆくかであった。甥のバキール・アリーはかなりの仕事をしていたが養うべき家族があった。事態をさらに悪くしたのはフサイン・アリーの結婚で、金が足らず引きのばされていた。唯一の当は、ランプルの太守であった。1868年7月、ガーリブはランプルの太守にそのことにつき手紙を書き頼んだ。まず第一の頼みは、ガーリブの借金を代わって返済してくれること、第二はフサイン・アリーの結婚費用を出してくれること、第三はガーリブの死後、フサイン・アリーに毎月100ルピーづつ送ってくれることだった。ガーリブは王宮やパトロンに恩恵を受ける要求をすることはためらわなかった。そうすることにより有名な廷臣の役割が果されると考えていた。またパトロンには、価値ある詩人をかこう機会を与えてやっていると考えた。ガーリブは繰り返し要求の手紙を出した。しかし太守は掛かわり合いになろうとはしなかった。ガーリブが死ぬとランプルから金は来なかった。

### 9) 死の直前のガーリブ

死の数日前、ラクナウのカージャ・アジーズッディーン・アジーズが見舞いに訪れた。アジーズは「ガーリブは読みかけの本を胸の上に置き、目が字を追っていた」<sup>34)</sup>とガーリブの様子を記し、さらにその後、食事が運びこまれた時の様子を記している。「わざわざ来ていただきありがとうございます。わたしの弱りようがお分かりになったでしょう。動けません。わたしの目の悪さにお気づきになったでしょう。人が誰だか見分けがつかない位です。お好きな声でいってもらってもわたしには聞こえません。あなたはわたしのガザルの読み方を知っておられます。一つだけ心残りがします。わたしが食べ物をどの位食べられるか、どうぞ帰られる前にご覧になってください」<sup>35)</sup>。ガーリブの心の鋭さとユーモアのセンスは最後まで残っていた。

ハーリーはなくなる前日、ガーリブを見舞うと意識を取り戻した。

1869年2月15日、ガーリブは亡くなった。デリーにあるニザーム・ウッディーン・オーリアの墓の近く、ローハール家の家族の墓地に埋葬された。生まれはスンニー派であり、葬式はシーア派すべきかスンニー派すべきか問題になったが、ランプルの太守の言葉でスンニー派の仕方でした。ガーリブの妻はその一年後になくなった。

ガザル125-7

Ghālib bhigar nah hō to kuchch aisā zarar nahīn

Duniyā hō yārab aur merā bādshāh hō<sup>36)</sup>

ガーリブ位いなくても なんの困ったことはない

どうか神よ この世とわれらの国王とをあらせてほしい

### 注

- 1) P. Spear, *Twilight of the Mughals*, England, 1969, p.201.
- 2) Asadullah Khan Ghalib, *Dastanbuy*, Delhi, 1970, p.31.
- 3) PAVANK, VARMA, GHALIB, New Delhi, 1988, p.142.
- 4) Ghalib, *Dastanbuy*, p.32
- 5) *Ibid.*, p.40-41.
- 6) *Ibid.*, p.50.
- 7) *Ibid.*, pp.41, 42, 44.
- 8) *Ibid.*, p.30.
- 9) *Ibid.*, p.31.
- 10) Syed Mobarak Shah's narrative
- 11) Ralph Russell and Khurshidul Islam, *GHALIB Life and Letters*, London, 1969, p132.
- 12) *Ibid.*, p.159.
- 13) *Ibid.*, p.161.
- 14) *Ibid.*, p.161.
- 15) Ghalib, *Dastanbuy*, p.62.
- 16) *Ibid.*, p.69.
- 17) *Ibid.*, p.59.

- 18) Ibid., p.34.
- 19) PAVANK. VARMA, GHALIB New Delhi, 1988, p.155.
- 20) Ibid., p.60.
- 21) Q. Hyder S. Jafri, Ghalib And His Poetry, Bombay, 1970, p.38.
- 22) Ghalib, Dastanduy, p.67.
- 23) Q. Hyder S. Jafri, Ghalib and His Poetry, Bombay, 1970, p.47.
- 24) Ralph Russell and Khurshidul Islam, GHALIB Life and Letters, London, 1969, p.291.
- 25) M. Sadiq, A Histovy of Urdu Literature, p.246.
- 26) Q. Hyder S. Jafri, Ghalib and His Poetry, Bombay, 1970, p.45.
- 27) Ralph Russell and Khurshidul Islam, GHALIB Life and Letters, London, 1969, pp.300-304.
- 28) Q. Hyder S. Jafri, Ghalib and His Poetry, Bombay, 1970, p.48.
- 29) Asad-ullah Khān Ghālib, Diwān-e-Ghālib, Ferrozsonsp Lahore, 1989, p.205.
- 30) Ibid., p.226.
- 31) Ralph Russell and Khurshidul Islam, GHALIB Life and Letters, London, 1969, p.346.
- 32) Q. Hyder S. Jafri, Ghalib and His Poetry, Bombay, 1970, p.54.
- 33) Ibid., p.55.
- 34) Quoted in A.A. Beg, p.77.
- 35) Ibid., p.78.
- 36) Asad-ullah Khān Ghālib, Diwān-e-Ghālib, Ferozsons Lāhōr, 1989, p.120.